

大学教育再生加速プログラム(AP) 中間評価結果

整理番号	31	大学等名	京都外国語大学
テーマ	テーマ I・II 複合型		

【総括評価】

A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。

【コメント】

<優れている点>

- ・外国語学部のみを有する私立の外国語大学としての特長を推し進めるために、本事業の趣旨に沿った取組を構築し推進している。本事業スタート時に行われたカリキュラム改定については、グローバル人材の養成に向け、ジェネリックスキルの養成をベースとした社会実践につながるキャリア教育を一層強化する体系的な教育課程となっており、評価できる。
- ・アクティブ・ラーニングに関する取組については、十分なりサーチに始まり、様々な科目への落とし込みを行っている。外国語教育との親和性が高く、「反転授業型アクティブ・ラーニング」の成果が TOEIC のスコアに好影響を与えていることは評価できる。
- ・学生サポートシステム、自己分析システム、モニタリングシステム等の環境を整え、学修成果の可視化に向けた取組を強化していることは評価できる。また、平成 28 年度の卒業生に対する大規模調査については、今後の取組への反映が期待でき、評価できる。
- ・学内の実施体制において、3つの運営グループが編成され、相互に連携を取りつつ推進されていること、また、5カ年計画評価委員会において PDCA サイクルが機能していることは評価できる。

<改善を要する点>

- ・外国語にウェイトを置く方針が本大学の差別化の軸になることは否定できないが、外国語以外の科目の強化が課題と考える。「サーバントリーダー」の育成に向けた授業デザインや、教員の指導内容に更なる強化が必要である。
- ・目標に対する達成度は各項目ともに概ね順調だが、平成 28 年度の退学率が前年度に比べて上昇しており、また、目標値にも達していないため、改善する必要がある。
- ・学内の取組の学外への発信は積極的に行われているが、この取組を更に強化するとともに、外部の視点から活動をブラッシュアップする必要がある。
- ・本事業を通じ、可視化された部分以外で、学生の行動、教員の意識、学内組織の変化、卒業後の進路など、その変化について継続してフォローする必要がある。また、様々なインフラ構築で蓄積されたデータをどのように生かすのか、今後の取組に期待したい。